フレンケル装置を用いてAngle class IIの大白歯関係を改善した症例報告

○黒田國康

(三善歯科医院・福岡市)

【目的】

Angle class II 症例の中で頬筋口輪筋複合帯の過緊張などの機能的な問題を伴う不正咬合症例の治療の難易度は高い。ドイツのフレンケルにより機能的な矯正装置として考案されたフレンケル装置(以下FRとする)は、このような症例に対し、思春期成長による顎発育が旺盛な時期に適応された場合、歯列弓の側方拡大や上下前歯の歯軸傾斜の改善、そして下顎骨の前方成長の促進による上下顎骨の前後関係の改善をもたらす。FRを用いてAngle class IIの大白歯関係を改善した症例を報告する。

【対象】

初診時年齢6歳7か月の男児。歯並びを気にして来院。下口唇巻き込み咬み、著しい就寝時の歯ぎしりがあった。大白歯関係はFull class IIであった。

【結果】

歯列弓の形態を整えた後、再診断を行い(オーバージェット約14mm)混合歯列後期よりFRの使用を開始した。FR装着当初より装置の違和感からなかなか装着時間が増えず、何とか週5日ほど使用できるようになると、徐々にオーバージェットの改善が見られたが、セファロ分析の結果、下顎前歯の唇側傾斜傾向が強まったため、下顎唇側線付のOCI(Orthopedic Corrector I)に装置を変更し使用してもらうようにした。ただこの頃になると本人の中学受験のため矯正に対する意欲の低下があり、ほとんど使用できず、多少オーバージェットが残った状態で終了することとなった。

【考察】

FRのような機能的矯正装置は顎関係の改善をもたらす有用な装置であるが、本人の意欲に左右されるところもあるので、使用時期をよく検討し適用しなければならない。

【文献】

Rolf Frankel (著), 中田 稔 (訳): 「フレンケル装置とそのテクニック」クインテッセンス出版, 1997

ⅢA～ⅢC期にかけて咬合誘導を行った一例

○仁部郁代

倉元歯科医院(宮崎県日南市)

【目的】

小児歯科の臨床は、幼児期・学童期・思春期へと成長していく中で、口腔内が乳歯列から永久歯列へとダイナミックに変化していくため、患児の成長を見守りながら口腔の健康を維持・管理し、健全な永久歯列へと誘導できる事は大切である。今回、正常咬合に導く事ができたので報告する。

【症例】

初診時年齢: 6歳10か月 女児

主訴: 歯並びが気になる(下顎右側第二側切歯が舌側より萌出)

家族歴: 母親に矯正治療の経験あり

顔貌および口腔内所見: 顔貌は左右対称

口腔内は overbite 2mm、overjet 2mm で、正中は、下顎が右側に 2mm 偏位し、臼歯関係は両側とも Angle I 級であった。

ANB5° より骨格型 I 級 Angle I 級叢生症例と診断した。

【治療経過】

6歳11か月 矯正検査

7歳1か月 上下顎歯列 Quad Helix 装着

7歳6か月 上唇小帯切除

9歳2か月 上顎両側第一小白歯を抜歯後
上顎両側犬歯を開窓し牽引

9歳8か月 下顎両側第一小白歯抜歯

【考察】

咬合管理において抜歯部位および時期の検討は重要である。永久歯列に移行する時期に、上下顎歯列弓の拡大および上顎両側第一小白歯抜歯による上顎両側犬歯の歯列誘導より叢生が改善され、健全な永久歯列へと導く事ができたと思われる。現在も永久歯列完成途中であるため、定期的な口腔管理が大切である。